様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１１３４

研究課題名（和文）アジア・オセアニアにおける高大の国際的接続に関する調査研究

研究課題名（英文）Comparative Study on international articulation of High School and University in Asia and Oceania

研究代表者
竹熊　尚夫（takekuma, hisao）

九州大学・人間・環境学研究科（研究院）・教授

研究者番号：１０２６４００３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：国際的高大接続は、大学の国際化、受入の国際基準化の進行にあわせて、語学学校を経由せず大学や高校の予備教育を通じてあるいは直接に大学に入学するケースが増えつつある。国際的高大接続には、後期中等教育、大学予備教育、中間の中等後教育課程機関で教育課程が設置されている一方、それぞれの教育資格の認証が各教育体系の中で進められている。中国、マレーシアの送り出し側、日本、オーストラリアの受け入れ側の両方において、国内資格と海外資格の統一化、多様な資格枠組みの整備、予備教育課程の制度化、受入の国際化によって大学前基礎教育課程が整備され、そこで学力認定、教育内容の収斂化が進んでいる。

研究成果の概要（英文）：The progress of International articulation of secondary school and university requested internationalized entrance standard and university curricula. The students who have studied through the pre-university course attached high school or university directly enter the university is increasing. International articulation includes upper secondary education (certificate) and pre-university education (Form 6) and after secondary education (diploma) . Several certifications and diplomas are recognized and evaluate in each country’s educational system and qualification framework. Under those situation, pre-university Foundation Programs are institutionalized even in sending and receiving countries within the secondary school or university. The inclination of convergence of academic competencies and study-contents which learned in mother country for the foreign university and special/liberal-art undergraduate course, is getting appear in accordance with international articulation.

研究分野：比較教育学

キーワード：高大接続　国際接続　中国　オーストラリア　マレーシア　予備教育　準備教育

１．研究開始当初の背景

わが国の高等教育において昨今、英語コースの発展、海外での日本語教育の充実、国際教育交流の深化に伴い、多くの大学でも様々な国・地域から、多様な教育を受けた中等教育修了者を直接受け入れることになりつつある。国際化を標榜する有名私立大学をはじめとして、これまで大学附属の日本語別科や独自の交流ルートによる国際化戦略を持つものも多いが、現実問題として、大学合格基準即ち高校での学業成果への評価や資格認定基準が公開され、諸大学間で共有されることは少ない。また、日本の大学受験において、アビトゥア資格やインターナショナル・バカロレア（IB）は大学入学資格として認定されているものの、詳細な科目については大学や学部の判断に任され、海外の中等教育修了資格について科目構成やそれぞれのレベルを評価する機関は、海外にはあるものの、日本では海外と比べて、こうした海外の学歴資格の評価機関に該当するものがなく、十分な検討はなされていないのが現状である。

こうした海外資格評価の先進国であるアメリカでは NAFSA(全米国際教育交流協議会)や AACRAO(米国大学アドミッション・オフィサー協会）などが留学元である途上国の教育資格について調査し、留学資格認定、資格証書の発行を行っている。この他、NARIC(National Academic Recognition Information Centres)、AICE(国際資格評価協会)、CEC（全米外国成績資格評価審議会）等、多数の機関が海外資格の同等性に関する評価活動を行っている。一方で、アメリカの教養教育型大学への受入と異なる、日本の大学の専門教育への接続が前提となる受入側のニーズに十分適うものともなっていない。これまで、大学側から見た接続問題に関する研究としては、アメリカ、オーストラリア、韓国、スイス、ドイツ等の中等教育資格試験の事例研究があるが、制度と試験内容の改善改革に焦点化したものであり教科目の幅について大学の入試選抜・教育側から十分活用可能なものとはなっていない。

従来、大学側、入試、留学生受入担当者に任されてきた各教科の教育内容・単元に踏み込むことは容易ではなく、大学側高校側などの個別対応とされるため調査研究としてアプローチすることは困難であったと考えられる。教育学の分野からやや離れた専門課程の教育あるいは教科教育側において、高等教育や教育研究機関及び教育研究者から海外の中等教育の状況を把握することによってその接続を促進しようとした研究もある。一般の教育課程の国別調査、教科書制度の国別比較研究は広範な国際調査報告書を出しているが、これらは主として先進国及び中国の状況報告であり、これを基礎データとすることはできよう。しかし、一般の公立学校での学習範囲はある程度把握できるものの、国際的接続の視点からは、海外留学を目指す学校は主としてエリート校であり、外国語学校等特殊な教育課程を持つ学校が多い。例えば、国際学校では香港やアメリカの教科書をそのまま用いている学校もあり、教科書以外の補助教材を用いて、資格取得や大学入学資格試験準備を進めている。海外への学部段階での留学を目的とするエリート国際学校は、各国の教育制度外の特殊領域に位置する。特に、アメリカの AP(アドバンスト・プレイスメント)プログラムによる留学促進策や、国際バカロレア（IB)、英国の A レベルといった国際共有資格の取得を目指す海外の中等学校、留学派遣を前提とする外国語学校、大学入学資格の予備教育機関等が中国、マレーシア、オーストラリアには多数存在する。

２．研究の目的

本研究は学部段階の海外留学において、大学や予備教育機関が、海外で取得された後期中等教育修了資格をどのように認定し、学部留学への志望学生を選抜し受け入れ、補習教育を行っているのか、また、海外の中等教育段階の学習状況について、海外調査を基に明らかにし、高大の国際的接続を促進させることを目的としている。

本研究では調査研究の対象に、受入側としては大学、予備教育機関、送出側としては、海外への送り出し高校あるいは中等後教育機関を設定した。３か年の研究機関において現地調査を通して高校、大学側それぞれの教育状況を明らかにし、収集資料を分析、整理することで、個々の学生や国別の修了資格から学習状況が把握できる学習単元表と基本枠組みの作成を目指すものである。

３．研究の方法

本研究では教育課程の単元一覧を指針として、これを数学、物理、化学などの理数科目、英語、日本語、クリティカル・シンキングなど他の教育内容へと視野を広げることとしている。また全教科のバランス、学習し単元を重視した包括的な整合表(基本枠組)を作成し、中等教育修了生の学力、そして各大学受け入れ際の評価・補修・入学へという接続過程をよりスムーズにするための方策を検討・開発することに主眼を置いている。

本研究では、まずオーストラリア、日本、中国、マレーシアの４か国を事例として現地調査をおこなっている。他の国々についても、オーストラリアと日本の受け入れ状況については情報を収集し、学部専門別の海外学生の教科目別の評価状況と方法、受け入れ基準等の実態を把握する。次に、中国、マレーシアについては、高校や私立学院や予備教育機関への調査収集データを元に、中等教育の関連教科の単元別一覧を比較検討している。最後に、現地で得られた学習単元の類似と相違

箇所を整理すると共に、それぞれの単元別の評価方法について、各学校や国家資格における評価、採点方式の情報を収集し、包括的な基本枠組を検討する。

本研究は、現地でしか得られない教育課程の情報を、特に使用教科書から収集し、これまで十分に確立されてこなかった、高大の国際的接続部分にあたる教育機関での教育内容、学習単元、評価方法の整理を行い、国際的接続をより促進するもので、そこで作成される学習評価の教育課程基本枠組が、我が国ならびに海外の高校、中等後教育機関、大学での準備、選抜、補習など様々な次元で活用されることを目指している。本研究は、その第１ステップとなるもので、その基礎作業を踏まえ、国内、海外の更なる調査を進めることで精緻化し、国内の中等教育や高等教育の国際化や国際教育交流を更に促進する。このため、本研究では、送り出し国の後期中等教育シラバス、テキストをはじめ、主要な送り出し校である国際中等学校での教科内容・単元別の修得状況や学力判断基準を収集する。

受け入れ国では、海外の国際教育機関および諸大学の本部・学部のアドミッションオフィスにおいて中等教育での教育内容や各教科の学力を如何に認定しているのか、どのような点に問題があるのか、インタビューを行うと共に、学習内容把握のための教育課程の確認手段、学力評定のための試験方法と資料に関する情報を収集している。

本研究では、日本、中国（上海、広州）、オーストラリア、マレーシアの４か国での数地域の調査に加え、新たにモンゴルの予備調査を行った。現地調査を短期間で実施するため、研究協力者を含めた数名による集約的な調査を行った。

研究協力者は以下の通りである。

花井渉（学術振興会 DC 特別研究員：博士後期課程）IB・英米の海外受け入れ調査

史媛媛（博士後期課程）中国の高校、日本と中国の大学での受け入れと派遣調査

朱静雯（博士後期課程）中国の高校、オーストラリアの受入大学調査

メルウィン・ロー・ゼー・ハン（修士課程 1 年）マレーシアの高校、私立学院

宮前奈央美（博士後期課程単位取得後退学）モンゴルの高校教育調査

４．研究成果

国際的な高大接続は、日本を除く先進各国、特に、英語圏ではその発展が著しい。これまでの国際教育評価機関による中等教育資格の認証に加え、各大学での留学生受入実績に基づく海外の資格評価の蓄積、そして、近年では IB を初めとした国際資格を国内資格と如何に評価し、同等性を認証するかについての評価システムが開発され、アカデミック教育と職業教育との融合や新しい学力、コンピテンシー論を加味しながら進展している。

国際的高大接続を検討する際、まず踏まえなくてはならないことが言語教育との関わりである。中間報告書でも述べているが、G30 による大学教育の英語化と留学生受入強化により、中国から日本への留学においてこれまでのような日本語学校を経由せず、直接大学に入学するケースも増えつつある。また一方で、高校段階で日本語教育を強化し、専門の日本語教師を配置したり、語学学校とのタイアップによる日本語教育を実施する事例もある。一方で、オーストラリア調査では大学が語学学校と連携したり、附設の基礎（ファウンデーション）教育機関を通して語学教育を行ったり、完全に民間の語学学校としてそこからオーストラリアの大学進学を目指すという様々な上昇のための経路(pathway)も見ることが出来る。語学教育プラス必要な専門科目の不足分の修得が国際的高大のつなぎ目で必要とされる科目と内容である。

送り出し型予備教育と受け入れ型予備（補充）教育を区別して、受入側の補充教育による接続について、ここでは特にオーストラリアとマレーシアを事例に説明したい。教育機関の所在地についても母国と留学先国を分けることが望ましいが、グローバル化が進む現在、大学ブランチ・キャンパスなど相互に入り組んで、どちらの国にあっても学力評価という面ではそれほどの相違がなく、煩雑さを避けるため、送り出し側と受け入れ側と直接入学という３つのタイプに分けている。

オーストラリアの留学生受入は予備教育課程である、英国の影響を受けたファウンデーション・スタディーズ・プログラムの発展に特徴を見ることができる。ファウンデーション(foundation programme)とは基礎コースであるが、大学に設けられたフォーム・シックス(Form 6：中等後教育段階の英国式大学準備課程)ということが出来よう。

マレーシアにおけるマトリキュレーション（matriculation programme)は大学に附設された大学予備教育課程(preparatory programme)といわれている。その意味では、正式の大学入学試験ではなく、その事前の中等教育試験・資格（SPM)で、予備教育課程に入れる準備教育、或いは予科課程である。マレーシアでは、本来。マレー系を中心としたブミプトラの学生のために、大学側が特定の科目（科学・会計等）を準備したアファーマティブ・アクションに基づく課程であった ）。現在、マレーシアでは１年から２年の課程があり、マラ・カレッジ、マトリキュレーション・カレッジ、マレーシア国民大やマラヤ大などに設置されている。

一方、マレーシアでは一般には、フォーム・シックスは中等教育機関に付属したり、独立で存在するが、大学に附設される場合には、一部受入を前提としたものであることから補充教育と言うことも可能である。マレーシアの場合、大学附設のファウンデーションはマラ工科大学(UiTM)にもあるが、これはブ

ミプトラのための受け入れ型の予備教育と言えよう。マラヤ大学は従来大学内に Pusat Asasi Sains（基礎科学センター）を設置していたが、現在、マラヤ大学の Pusat Asasi Sains はファウンデーション・スタディーズ・プログラムとして大学内では位置づけられている。このファウンデーションは基礎(Asasi)にあたるものである。このプログラムの一つに、現在も日本留学準備プログラムがあり、同じく UiTM にもブミプトラ用にこの Pusat Asasi が設置されているが、海外資格者は受け入れるものではなく、国内からの予備教育課程であり、海外への予備教育課程にもなっている。伝統的に海外留学のための教育組織を大学内に置いたと言うことであり、これは中国の華南師範大学や、東北師範大学の日本留学準備教育なども同じような位置づけと言える。

マレーシアにおいて教育省は 1998 年に省内にマトリキュレーション部門(Matriculation Division) ）を設置し、公的な高等教育機関内におけるファウンデーション・プログラムと共に管轄している。また、「マレーシアの資格枠組み(Malaysian Qualifications Framework: MQF)」では大学準備教育のファウンデーション・コースが高等教育セクターの最も下位の MQF レベル３にあたる、サーティフィケート・レベルに位置づけられている ）。

オーストラリアの場合も、国内の教育機関と資格の統一するために多様な資格を AQF(Australian Qualifications Framework) 資格制度枠組で整備し、様々な資格をそのレベルの統一と横の移動を広げると共に、予備教育課程の制度化を進めることで、国際化対応として様々な教育背景を持つ海外からの生徒の受入体制の充実が図られている。ここに、国内資格と海外資格の同等性の両方の整備化が必要とされる動向が見て取れる。受入の実際では各大学や教育機関において、予備教育プログラムの留学生の学力診断は必須であり、そこで不足部分の補充が行われる必要があるが、それはファウンデーション・コースの選択科目として授業科目を受講するなかで実施され、ここで大学独自の学力認定と教育組織・教育内容の集約化・収斂化が進むこととなった。

オーストラリアの大学は英国式であることから、NARIC など英国の海外教育情報の蓄積を活用して留学生を受け入れている。また、日本と同じ専門教育を重視する高等教育課程であるが、専門と予備教育課程の連携が狭く、かつ整理されており、日本の初年時にあたる教養教育課程が無いため、３年間の専門課程で学部段階を卒業できる。授業料などは日本の国立大学の数倍であるが、ファウンデーション・スタディーズ・ログラムと合わせて、ほぼ４年間で卒業でき、その後オーストラリアへの就労滞在も可能であり、これらの経験を合わせ、更なる就職に継続し、永住権をとるという将来の目的に合致した移民政策と合体した高等教育戦略ともいえる。

オーストラリアでも日本でも高校卒業段階の優秀な人材の獲得競争が次第に広がりつつあるように、中国の「高考」の成績を認定する方向は拡大しており、この学力成績に加え、語学能力の向上によって、英語或いは日本語での大学入学資格を認める傾向があることから、中国の一般重点高校でも海外留学の道は広がりつつある。その場合、日本側の受入が、日本語学校経由か、大学附設の予備教育課程か、さらには、大学の国際課程や教養教育課程の改編によって対応できるのか、様々な形態での受入型予備教育のための取り組みがなされる必要がある。

送り出し型の予備教育の形態では、まず、高校にその送り出し準備をする機能が付与されている場合と高校の延長上で大学入学資格を得るための高校附属フォーム・シックス型の形態がある。これは高校側やその延長の教育機関が大学入学の責任を負うものではないが、大学入学資格の受験する為の準備教育を行う。公的機関としては、JASSO 日本語学校等、帝京マレーシア日本語学院（IBT）などがある。

これとは別に、大学附設として、大学入学がある程度認められ、マトリキュレーション式に送り出し準備をする機関がある。受け入れ責任母体は大学側や送り出し側が教育を提供し、海外留学へ送り出すというものである。中国華南師範大学の U-Link でみられた海外大学との連携による送り出しであり、先の帝京マレーシア日本語学院(IBT)は一方で政府派遣留学生を引き受けているが、他方で、帝京大学等の大学進学も可能としている。そうした意味では日本にある文部科学省準備教育課程指定校の現地版にも、日本の大学予科課程にも近い。この他、大学附設型の準備教育としては JICA の援助を受けて、モンゴルでは大学や大学院に留学生を送り出すための母体は、大学内に設置され、一部は当該大学の大学生として在籍しながら留学するという方策も試みられている。

そして従来の、送り出し側における、民間語学学校や、中国の「新東方」等の留学送り出しおよび斡旋教育機関での語学留学は民間教育機関型と位置づけられる。

第三のタイプとしては直接連携の形態がある。中国では国際部併設などによく見られるが、江蘇省の堰教高校は高校日本語教育併設（附設）型、広州や北京の IB 校は高校内蔵型と言うことが出来るだろう。直接大学側が派遣教員による面接や教育課程認定を行い、優秀な学生をリクルートし直接大学に入学させるものである。この他、中国等で見受けられるが、帰国子女のようなルートで、大学のトゥイニング課程に倣って、高校途中から海外の高校に留学し、そこから留学先国の大学への直接入学を狙うものなどもここに該当するだろう。オーストラリアの専門科目

のみの入学条件やアメリカのような教養教育型の必須科目受験とは異なり、日本は複数科目で且つ日本語というハードルがあることから、より良い大学への進学を目指す場合には、こうした高校３年間の２＋１というトゥイニング課程は効果的であり、今後の展開が注目される。

海外の教育証書の同等性と資格枠組と教育課程の収斂に向かう方向性を持ちながら、国際的高大接続には、後期中等教育の多様性、大学教育の実態、そしてその中間に存在する中等後教育段階の接続教育機関の多種多様性、そして資格認証をする機関の役割と、大きく４つの種類の機関が高大の国際的接続にはそれぞれ役割を果たしている。

それぞれの機関や資格は、国内向け、海外向け、そして、教育資格と学力といった二つ以上の役割を果たしている場合が多い。中間報告書でも事例を示したように、中国の高校側、日本やオーストラリアの大学側、そして留学を媒介する留学教育機関はそれぞれの立場で有為な人材の輩出とリクルートを国際市場への参入として取り組んでいる。特に、海外からの学生を受け入れて学生自身が持つ学習内容の不足箇所を、自国の大学制度に合うように「均す」役目をしている仲介の教育機関と予備教育機能を持つ語学学校、大学の附設機関であるマトリキュレーション、もしくはファウンデーション・スタディーズ・プログラムは学生の教育歴と学力審査の機能を持たざるを得ない。中間報告書で示したオーストラリアの大学の海外資格との同等性（出願資格要件）以外にも、こうした海外資格リストは留学生の受入のみならず、移民の受け入れにも用いられることで必要性が認められている。マレーシアでも高等教育局のマレーシア資格機構(Malaysia Qualification Agency: MQA)によってマレーシア版の資格の同等性比較リストが掲載されている)。イギリスの UCAS と同様に、当該国における大学入学資格が入学試験ではなく、卒業試験であり、英連邦諸国の影響下にあるが故に、国内資格との同等性に関する調査研究との連動した動きが進んでいる。より良い人材獲得を目指す国際教育マーケットの中で高校と大学の直接的な接続には、高校と大学間の連携も必要となってきており、高校の語学教育を高める動き、大学の予備教育としての語学教育、教科教育の充実化も進んでいる。一方で、これまで媒介となっていた留学教育機関が Diploma 資格を提供して、大学進学を促進する動きも見受けられる。日本においては、高等学校卒業資格（卒業証書）に加え、実現の可能性は未定だが、センター試験の高度化によるディプロマ化や言語や予備教育課程での専門学校修了資格の認定などができればこうしたものに該当するであろう。

こうした状況において、本研究で提示した、数学、物理、化学の教科書単元表の比較検討は、ブルームを初めとした学習理論に則したより詳細な段階によって更に精緻化される必要がある。既に、PISA を嚆矢として、コンピテンシー論が初等中等段階の様々な教育課程に組み込まれつつあるが、オーストラリアにおける ACARA（オーストラリアカリキュラム評価報告機構）の General capabilities（一般的能力群）と達成基準)、IB における TOK（Theory of Knowledge 知識の理論）、そして日本の国立高等専門学校機構においても学習指導要領の対照や各課程別の項目毎到達レベルが検討されているところである。

本研究では、送り出し国受け入れ国、教育課程、科目、言語教育、単元、学力、能力、資格、入学試験など多様視点から分析を加えることとなったが、そうした輻輳した調査対象が次第に収斂しつつあることも事実であり、海外の教育交流、高大接続のための基盤は既に完成しつつある。日本における教育展望として、日本の各大学がその枠組みの中でそれぞれの特性を活かしながら地位を確立していくことが求められる。特に、高等教育、大学における教養教育、一般教育の位置づけは、様々な教育理念や考え方が各方面から明らかになった。本研究を通じて、高大の国際的接続の視点から見ると、大学の一般教育は基礎教育と位置づけられる側面と、教養教育として位置づけられる側面の二つに分けることが出来るであろう。即ち、基礎教育は、後期中等教育或いは中等後教育のレベルと専門教育との接合について、教養教育は専門教育から学際教育へとつなげる視野や研究の裾野の広さを担保するものであると共に研究者やエリートとしての人格教育を培う部分でもある。

高大接合の役割を果たすのは、中等後教育かもしくはこの基礎教育部分である。基礎教育は国際化に対応する大学はこの部分では初年次教育としての海外の教育歴の相違を踏まえた、国際言語修得、日本語を含む、アカデミック・スキルを修得する期間として位置づけることがスムーズな接続を可能とする。既に、TOEFL の一定水準以上の点数の取得者は大学においても英語教育を受講義務がないという制度があるが、こうした制度が他の科目、単元、技能にまで広げられることで重複した学習を避けることができ、より高次の、効果的な学習をもたらすことができるであろう。科目を制限して必要科目の修得での入学を認める３年制の専門教育を提供するオーストラリア、もちろんアメリカなどの教養大学における基礎技能の修得を入学条件とする事例もある。日本の EJU 試験については、日本型の１年間程度の教養教育について行けるだけの知識を求めるための独自の評価方法と評されているが、それに対する海外からの風当たりは強い。彼らから聞く声は、専門知識と、語学力で十分という声である。一方、日本型の教育体制の中で、学習態度の欠如、計算方法を初めとした学習内容の相違

から生じるアカデミック・能力の齟齬はなかなか解決できていない。

一方、教養教育については、教養教育を日本の教育の一つの特徴として掲げられる教育理念も確かに重要であるが、米国式でも豪州（英国）式でもないところに、海外からの接続の難しさの一つが顕在化してきている。海外からの留学生や多様な学生の教育背景、文理別の高校での習得科目の相違などから既に、教養部のような教養科目だらけの混在や高校での学習の延長といった興味を引かない内容などから、専門教育に進む前の高いハードルとなってしまっている。また、教養教育は理系にとっては専門教育の視点から大半が基礎教育となっている現実もある。しかしながら、教養教育を専門教育の前に学ぶことにより効果的とはなるかも知れないが、基本的に年齢で縛るものではなく、低年次から高年次に至る様々な修得形態がありえる。特に、文科系科目は積み上げ科目ではなく、高年次でも十分対応可能であり、必要を感じた際に、自由に取得できる科目であることが望ましい。また、このような科目内容は現実には、理科系分野の大学基礎科目においても共有されている。

国際的接続の観点において、教養教育は形成されるべき人間像とも繋がる重要な役割があり、これを寄宿舎教育の中で実践している例もある。大学の国際化を考える上で、多国籍な大学像や国際専門人材の養成には知識、態度、技能の背後の教養的知識は欠かすことが出来ないものであり、多様な教育課程、試験、資格、そして人材の形成へと一連のシステムを通して、中等教育から適切な人材を見つけ出し、教育を提供していく。その中での能力評価であり、教育課程であることを、改めて再認識し、再構築することを国際的接続は求めている。

具体的な事例や内容については下記の論文の中で論述・検討されている。論文と資料は、中間・成果報告書及び下記ホームページで掲載している。

【中間報告書】
・中国における高校、送り出し機関、大学の事例
・オーストラリアにおける受入機関、大学の事例
・日本における海外の高校からの留学生受け入れ
・海外高校と日豪の大学との接続
・欧米諸国の大学におけるアジア人留学生の位置づけ―国際的な資格・成績認証ネットワークを中心に―

【成果報告書】
・国際的高大接続の形態と比較考察
・中国の後期中等教育における国際教育カリキュラムの導入とその発展状況
・オーストラリアの大学の接続―事例大学の分析を中心として―
・批判的思考の教育状況に関する国際指標―教育目標、内容と評価に着目して―
・マレーシアにおける高大の国際的接続に関する調査研究―私立テイラーズ・カレッジの事例―
・モンゴルの教育発展に関わる日本の教育協力と日本式学校の創設
・資料：数学、物理、化学の日本、中国（上海、江蘇）、マレーシア（政府・独立中学）の教科単元対照表

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　２件）

竹熊尚夫　「日本の高専輸出とその『移植』プロセスに関する予備的研究 ―モンゴルとマレーシアの比較枠組み―」『大学院教育学研究紀要』第 18 号　九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門 2016 年 3 月

竹熊尚夫　中国の高校から日本の大学への留学：高校数学の学習単元の整合表の試み（その１），（その２）2014 年 8 月 29 日
JST Science Portal China ＜http://www.spc.jst.go.jp/hottopics/1409/r1409_takekuma2.html＞

〔学会発表〕（計　２件）

竹熊尚夫「アジアから日本への教育接続を通してみた人材育成の空間」人間環境学府マンスリー学際サロン発表　(2015.11.25)

竹熊尚夫「マイノリティの教育の国際化から高大の国際的接続の可能性へ」九州大学韓国公州大学教育研究国際フォーラム発表（2015.9. 12）

〔図書〕（計　２件）

竹熊尚夫『アジア・オセアニアにおける高大の国際的接続に関する調査研究』研究成果報告書 2016 年 3 月 31 日文部科学省科学研究費助成事業文部科学省科学研究費 基盤研究（C）25381134 研究代表者竹熊尚夫

竹熊尚夫『アジア・オセアニアにおける高大の国際的接続に関する調査研究―中国の送出学校とオーストラリア・日本の受入教育機関調査―』科研中間報告書 2015 年 3 月 30 日文部科学省科学研究費 基盤研究（C）25381134 研究代表者竹熊尚夫

〔その他〕
ホームページ等
http://comparaedu.org/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者
竹熊尚夫（TAKEKUMA HISAO）
九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号：10264003